2026/07/13

サマープログラム体験記

名古屋大学医学部医学科５年　村本裕紀

1｜はじめに

私は、2026 年 7 月 7 日から 7 月 13 日まで NUSOM（Nagoya University School of Medicine）Summer Program に参加しました。本プログラムには、名古屋大学医学部学生と、米国の Duke University、Johns Hopkins University、University of North Carolina、University of California, Davis、および英国の Lancaster University の医学部学生、計 22 名が参加しました。日本の地域医療や訪問診療の現状を学び実際に体験したほか、高齢者医療の最先端や研究についての講義とディスカッションを通して、それぞれの国の今後の医療と私たちの関わり方について考えることができ、大変充実したプログラムとなりました。さらに、日本の伝統文化に触れたり互いの文化を共有したりと、海外学生と交流を深め貴重なネットワークを築くことができました。

2｜高齢者医療・研究の最先端、多職種連携

本プログラムでは、国立長寿医療研究センターを訪問し、高齢者医療の最先端について学びました。医師、看護師だけでなく、理学療法士や言語聴覚士によるリハビリが高齢者医療において重要な役割を果たしていることがわかりました。最先端の動きの解析をもとにした歩行のリハビリや、フレイルや廃用によってリスクが高まる転倒による衝撃を軽減するための研究、さらには、患者に対してだけでなく介護者や医療従事者が重いものを持ち上げたり患者を介助したりするためのロボットの研究がされていたりと、高齢者医療を取り巻く環境を良くするための研究が進んでいることを肌で感じることができました。また、名古屋大学の老年内科学の梅垣先生の講義を通して、高齢者医療における多剤併用のリスクと原因を学び、特定の専門分野だけでなく、多分野にわたる疾患の知識が重要だと学びました。

3｜地域医療・在宅医療と患者の「生きがい」

かがやきクリニックで、訪問診療を実際に体験することはできませんでしたが、先生方の講義や海外学生とのディスカッションを通して地域医療や訪問診療について多くのことを学びました。地域医療において、特に高齢者はさまざまな病気や疾患を合併することが普通です。かがやきクリニックの市橋先生の講義を通して、血液検査の結果を見る際は数値が正常範囲に入っているかをただ見るだけではなく他の数値との関連からその数値の意味を考えるというように、それぞれの病気や疾患独立した疾患としてではなく、関連の中で病態を捉えることが大事だと学びました。病気の原因が何かを考えると同時に、患者の幸せの原因は何か、患者の生きがいは何か、何のために生きるのかを中心に捉えるのが大切だと感じました。患者が好きなことに対して、それを好きな理由は、患者それぞれの個性や価値観を反

映しており、この「マイクロハピネス」が患者の生きがいになります。そして、病気の原因や幸せの原因は患者が住んでいる家、さらには患者が住んでいる地域にあるのではないかという概念は私にとって新しいものでした。患者の医学的な病因だけでなく、患者の心理状態、家族や地域からの社会的なサポート、さらに患者が生きがいとして何を望んでいるかは、それぞれの要素が密接に関わっていることに驚くとともに、コミュニケーションを通して特定の病気ではなく患者の背景も含めた患者全体を知ることが大切だと強く実感しました。

4｜異文化交流と医療倫理

このプログラムを通して、バディである Paloma をはじめ参加した海外学生と医療の違いや文化や価値観の違いから、すぐにでも使えそうなカジュアルなスラングまで、たくさんのことを共有することができました。日本と米国や英国の医療制度は大きく異なることを改めて実感し、新しくたくさんのことを知りました。中でも最も衝撃を受けたのは、保険制度の違いにより米国や英国の医療費が日本よりはるかに高いことでした。上田先生の医療倫理の講義のディスカッションでは、仮に新生児が脳出血を起こした時に、家族として、また医師として何を考えるかを議論しました。日本と米国でどんな後遺症があるか、どういった治療の選択肢があるか、脳出血を起こした原因は何なのかを聞くのは共通していたのに対し、米国や英国では医療費がどれくらいかかるかを重視するということに衝撃を受けました。また、米国や英国は日本よりも人種や宗教、価値観などが多様であり、コミュニケーションの方法の違いについても知ることができました。

5｜感想と今後の展望

本プログラムは、私にとって本当に充実した経験となりました。中でも患者の生きがいを叶えるための医療について学んだことはとても印象的でした。高齢化が急速に進み、都市部での医師の集中と過疎地域での医師不足が進む現代において、地域医療や在宅医療は非常に重要な役割を果たしていくと考えています。私が将来都市部での最先端医療に従事するか地域医療に取り組むのかはまだわかりませんが、患者の生きがいを知ること、患者の背景にある心理・社会的な側面を知ること、そして、それぞれの医療従事者の強みを活かした多職種連携は、どのような医療従事者になるにしても生かすことができると考えています。

また、プログラムを通してバディとして一緒に参加した Paloma をはじめ、海外の学生と医療や文化について本当に多くのことを学ぶことができました。ここで得た協力なネットワークは今後の海外留学を始め、将来医師になった後も生かしていきたいと思います。

最後に、本プログラムにおいて貴重な機会をご提供いただいた国際医学教育学・国際連携室の先生方およびスタッフの皆様、地域医療・在宅医療の現場で充実した実習をさせていただいたかがやきクリニックの皆様、国立長寿医療研究センターの皆様、そしてご講義いただいた先生方をはじめ、関わってくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。




名大病院

